

連載「巣づくりの住まい」vol. 1

建築学科 准教授 石川恒夫 上毛 平成21年11月11日（水）

巣づくりの住まい・1

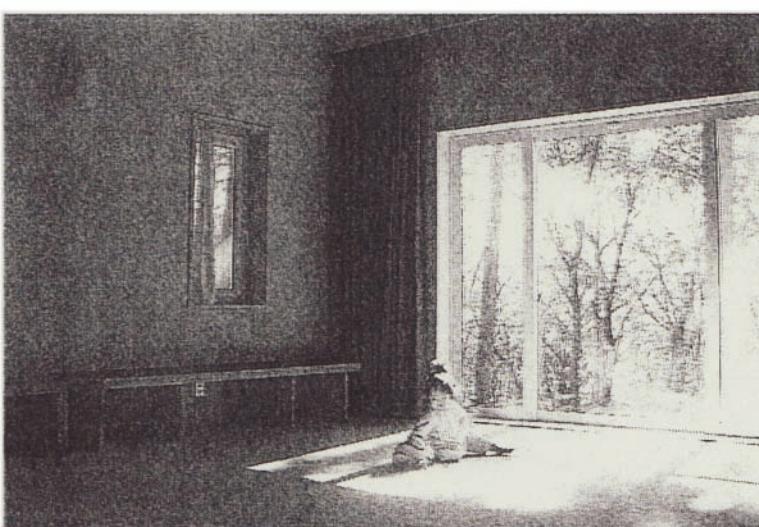
健康や環境に配慮を

「食・衣・住」
健康を脅かす恐れがあるというメラミンなどの化学物質が食品から検出された問題が昨年、頻繁に報道されました。メラミンという建築関係者にはプラスチックの原料としてよく知られています。

近年、建材からの揮発性有機化合物によるシックハウス症候群の問題が取りざたされる中、「食品」の安全と置き換えられて聞こえてくるのです。

共通の課題は、商品の偽り無き完全な成分表示であることは言つまでもありません。

「衣・食・住」は生活の基本であると言われますが、本来の順番は、「食・衣・住」でなければなりません。食によって肉



「共に」つくる必要性

体、つまり「第一の皮膚」としての身体皮膚が形成され、衣によつて季節や風土に応じた絵本「鳥の巣いろいろ」（偕成社）を手にして「第二の皮膚」としての衣服が織り成され、住によって家族の生活

鳥の生態を学ぶ
鳥の巣コレクターの鈴木あむるさんが描いた絵本「鳥の巣いろいろ」（偕成社）を手にする機会があり、娘と共に楽しんでいます。

石川 恒夫

をする「第三の皮膚」としての住まいがつくれられるからです。

鈴木さんは世界中を歩いて鳥の生態を巣の視点から調べ、生命の不思議と尊厳を訴えています。鳥は自分で材料を探し、その多くは当然、自分の活動範囲の中で得られる自然素材です。外敵や自然の脅威から守る最適な場所に、最適な形の巣をつ

ります。鳥があると感じています。そのための羅針盤がバウビオロギー（建築生物学）です。それはドイツを中心に歐米各国に広がりを見せており、人間の本性と気候風土を科学的に検証しつつ、住人の健康や地球の環境に配慮した、「巣」としての住まいづくりを目指すものです。

（前橋工科大学院准教授）



くり、大切な赤ちゃんを生み、はぐくみます。生物としての人間にどつても「巣」としての住まいは本来、大切な場所なのではないでしょうか。

ツバメは午前中にしか巣をつくりません。朝露でぬれた土が作業しやすく、かつ乾かす時間が必要であることを知っているというのです。

わたしは、建築に携わる誰もが、「巣」としての住まいが、住まいの住まいを「共に」つくることを意識し、学ぶ必

いしかわ・つねお

いしがわ・つねお
1962年東京都生まれ。早稲田大大学院修了。工学博士。ビオ・ハ
ウス・ジャパン一級建築士事務所代表。20
01年から現職。長野県軽井沢町在住。

バウビオロギーは生
命を守る健康な住ま
いつくりを西指す